

出土楽器が語る音の世界—楽懸—

これまで中国古代楽器を紹介してきたが、古代にあっては、楽器の音色に加えてその装飾された外観も音を越えた力を醸し出していたようである。音楽は決して聴覚だけで味わうものではなく、視覚も含めて全神経を総動員して感じるものだとすると、やはり古代楽器の形象にも注目せねばならないだろう。今回は、とりわけ鐘や磬を懸けた台としての楽懸について、あらためて考えてみたい。

鐘や磬を懸ける道具

中国雅楽の主要楽器である鐘と磬、これらは懸けて使用された。この楽懸について、細部にわたる解説がなされている『隋書』音楽志をみてみたい。

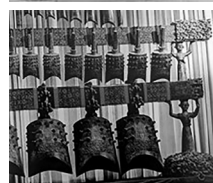
簠・簋は鐘や磬を懸けるためのものである。横に渡してあるものを簠といい、魚などで装飾する。縦に立てるものを簋といい、動物や鳥などで装飾する。簠は木の板をその上に置く、これを業という。殷人は業に鋸状の凹凸を彫刻し、そこに鐘や磬を懸けた。周人は厚織りの絹地で飾りを造り、それに壁を載せ、その下には五色の羽を垂らして、簠・簋の角にたてた。近ごろはさらに金の博山（装飾品）を簠の上に加え、五色の糸でつくったふさを垂らして、彩色の羽を合わせた。この方法は梁・陳・北齊・北周・隋の五代で踏襲され、ともにこの簠・簋を用いた（六朝楽府の会編著『『隋書』音楽志訳注』和泉書院、2016年、437頁参照）。

『隋書』の記述には、ほかに楽懸は上下二段となっていて、それぞれ8つの鐘や磬が懸けられていたという。その形態は清朝になっても踏襲されていた。下図のように康熙52年（1713）



には銅製鍍金で上下二段それぞれ8つの鐘で編成されたものが制作された（『中国楽器図鑑』山東教育出版社、1992年、72頁）。

この鍍金でできている一見豪華な清朝のものとは比べて、古代の編鐘はどうだったのだろうか。先の『隋書』の記述では、魚や動物で装飾されたとある。以前にも引用した1978年に発掘された湖北省の曾侯乙墓（紀元前433年）の編鐘は、その装飾も特別なものである。



その一部分をみてみたい。それは簠（横木）を支えている人形である。その足元と頭上には現在の感覚からはグロテスクに重なり合った小龍のレリーフがある。さらによく見ると、一つ一つの鐘を支えるのは、手を握り合った野獣である。荘厳な鐘の音は、聴く者の心を日常から遠い世界へとといざない、畏怖の念を起こさせるのに十分であっただろうが、この形象が生み出す視覚的効果が、何よりも戦国時代の王の巨大な権力を象徴しているようである（曾侯乙墓関連の上の三図は『中国音楽文物大系 湖北卷』大象出版社1999年による）。



埋葬された楽懸

さらに紹介したいのは、春秋晩期の浙江徐家嶺九号墓から1990年に二台が出土した銅製の鼓の懸け台（架座）である（修海林・王子初『看得見的音乐 楽器』上海文艺出版社、2001年、73頁）。河南省文物考古研究所にいまは保管されているこの架座は、頭は龍、身体は虎、足は亀の怪獣で、口から舌を出している。その頭上には蛇のような形の龍が6匹おり、孔雀石で象嵌の装飾が施されている。さらに背中には、1匹の怪獣がおり、その口には蛇が銜えられている。ここに懸けられた鼓は、楽しく不可思議な音楽の世界を表現していたように想像される。



その装飾の威容に魅せられて、上記の架座も曾侯乙墓の編鐘の楽懸も、ともに墓に埋葬された楽器を懸けていたことを忘れてしまいそうであるが、この装飾や形態は鎮墓のためであろう。精巧に作られた楽器群からは、あの世でもこの世と同じ音楽の快楽を味わうために制作されたという解釈もできるだろうが、おどろおどろしい形態の楽懸からは、死者を邪気から守る役割を音楽に託したとも推測されるのである。

皇帝と楽懸

話を生きている人間に戻そう。最初に紹介した『隋書』音楽志には、楽懸についてさらに具体的に以下のように記す。

高祖（楊堅）は天命を受けて即位（581年）すると、法令を定め、宮懸は東西南北の四方にそれぞれ2セットずつ配置し、12の鐘とあわせて20セットとした。1セットの楽懸にはそれぞれ1人を、建て太鼓には4人を、祝と故にはそれぞれ1人を配置した。歌・琴・瑟・簫・筑・箏・擗・笙・卧箏篴・小琵琶は、四面にそれぞれ10人をあて、編磬のもとに配置した。笙・竽・長笛・横笛・簫・篳篥・篳篥・塤は、四面にそれぞれ8人をあて、編鐘のもとに配置した（『『隋書』音楽志訳注』218頁参照）。

楽懸の数はその地位によって定められている。皇帝の宮懸は東西南北4面、皇太子の軒懸は東西北3面、さらに大夫の判懸は東西2面、士の特懸は東1面だけとなる。皇帝の宮懸は天地・宗廟の祭祀に、ほかはそれぞれの祭礼のためにもちいられた。しかし、それら形や数を揃えることを求めた雅楽奏楽は、結果として宮廷音楽のなかでも形骸化したものになった。白居易「立部伎」（『白居易集箋校』卷三）で、宮中音楽のなかで坐部伎の奏楽が素晴らしく、立部伎は劣るが、それよりもさらに劣悪なのは雅楽の楽人として「始めて楽懸に就いて雅音を操る、雅音の替壊一に此に至れり」と嘆き、これでは宮廷の天地の祭祀で、神を感動させることは無理だという。それでも楽懸にかけられる楽器やそれを操る楽人の配備という形式にこだわった雅楽奏楽は清朝までも連綿と継承された。もちろん単純に比べることはできないのだが、楽書に記された古の形をなぞることに汲々として生きる後世の統治者よりも、戦国時代の曾侯乙のように自分を楽しませ、また墓の鎮護のために、楽器とそれにより力を与える装飾を施した楽懸を自分の墓に埋めさせた古代の統治者の方が、より自由を謳歌していたように感じるのである。